

# 論 文 要 約

論文題目 非適応的コーピングに関連する認知要因およびその神経基盤

申請者 野田 智美

論文要約

本論文は、非適応的なコーピング選択に関わる認知要因として共感性と注意の制御を取り上げ、それらとコーピングがどのように関連するかを検討した2つの研究をまとめたものである。研究1では、健常成人を対象に、共感性とコーピングの関連を質問紙による横断的調査によって検討した。研究2では、先行研究からコーピングの困難さと注意の制御が危険因子として報告されている神経性やせ症患者 (Anorexia Nervosa : 以下AN患者)を対象に両因子の関連を検討し、さらに機能的磁気共鳴画像 (functional magnetic resonance imaging : 以下fMRI)を用いてその神経基盤を検討した。これらの研究結果から、共感性や注意の制御の低さは個人のコーピング選択を非適応的に方向付けることが示唆された。

第1章では、本論文の背景と目的を述べた。ストレスフルな状況を統制しようとして行われる認知的、行動的努力であるコーピングは、精神的健康の維持に大きく関わる要因である。コーピングはストレッサーや、ストレッサーによって生じたネガティブな情動に接近するか、それらを回避するかという次元から接近型 - 回避型に分類されるが、回避型コーピングは、精神的健康を大きく脅かす要因であることが先行研究から数多く報告されている。回避型コーピングはストレッサーから遠ざかる方向のコーピングであるために、接近型コーピングと同時に用いられるとは考え難い。そこで本論文では、回避型コーピングの多さと接近型コーピングの少なさを非適応的コーピングとして定義した。他方、適応的なコーピングを支える要因としてこれまで、自尊心、自己効力感、樂觀主義、主観的コントロールラビリティなどのパーソナリティ要因や、ソーシャルサポートのような社会的要因が特定されてきた。しかし、認知的要因とコーピングとの関連は報告が非常に限られており不明な点が多かった。コーピングに影響を与えるその他の要因に、効果的な対人コミュニケーションスキルであるソーシャルスキルがあるが、先行研究からソーシャルスキルの低さは相手の立場に立って問題を捉えようとする他者視点コーピングや、積極的問題解決コーピングの少なさと関

連することが示されている。他者視点コーピングは、他者の内的状態を推測、理解しようとする点で共感性を必要とすると考えられ、積極的問題解決は、ストレスから注意を切り替え、解決に向けた活動に集中するという点で、注意の制御を必要とするものと考えられる。そこで、本論文では、ソーシャルスキルを構成する認知的要因のうち、共感性と注意の制御に焦点を当て、それらが非適応的なコーピングとどのように関連するのかを検討すること目的とした。

第2章では、共感性とコーピングの関連を検討する目的で行った、健常成人を対象とした横断的調査研究について報告した。この研究の結果から、相関分析において共感性のスコアは全ての接近型コーピングのスコア（計画立案、情報収集、認知的再解釈、カタルシス）と有意な正の相関を、4つのうち2つの回避型コーピングのスコア（放棄、責任転嫁）と有意な負の相関が示された。また、媒介分析において、低い共感性と高い心理的苦悩との間の関連は、接近型コーピングである認知的再解釈の低さや、回避型コーピングである放棄、責任転嫁の高さによって有意に媒介されていることが示された。接近型コーピングである認知的再解釈に関するこの結果から、共感性の低い個人は、他者視点の取得が困難であるために、ストレス状況下において即時的に行われた自己中心的な解釈に固執しやすいことが示唆された。また、回避型コーピングである放棄、責任転嫁に関する結果から、共感性の低い個人は、他者の内面の理解や行動予測が困難であることや、日常的な利他行動の欠如に起因して他者からのサポートが得られにくいために、結果的に回避型コーピングを用いざるを得ないこと、すなわち、共感性の低い個人が放棄や責任転嫁などの回避型コーピングを用いるのは、社会的孤立による二次的な結果である可能性が考えられた。これらの結果から、共感性の低い個人は、非適応的コーピングを選択する傾向があるために、精神的健康が脅かされやすいことが示唆された。

第3章では、神経性やせ症患者を対象に注意の制御とコーピングの関連を心理学的に検討し、さらにGO-NOGO課題によるfMRIを用いて神経基盤の検討を行った研究について報告した。この研究の結果、心理データではAN患者は健常成人に比べて接近型コーピングのスコアが有意に低く、回避型コーピングのスコアが有意に高いことが示された。注意の制御のスコアについては、AN患者は健常成人に比べて低い傾向を認めた。また、相関分析の結果から、AN患者において注意の制御は回避型コーピングと有意な負の相関を示した。これらの結果から、AN患者はコーピングが非適応的になりやすく、さらに注意の制御が困難であるAN患者ほど回避型コーピングを用いやすいことが示唆された。行動データからは、AN患者においてGO-NOGO課題のcommission error率（反

応抑制の失敗)と回避型コーピングの間に有意な正の相関が認められたことから、注意の実行制御 (executive control)が弱く衝動性の高いAN患者ほど、ストレスに直面した際に衝動的に回避しやすい可能性が考えられた。fMRIの結果からは、健常成人においては反応抑制時の両側の前部島皮質の賦活の大きさは接近型コーピングの利用の少なさと関連する一方で、AN患者においてはこのような関連はないこと、健常成人とAN患者で脳活動に差がある領域として右楔前部が同定され、その活動はAN患者において回避型コーピングの少なさと関連することが示された。これらの結果から、健常成人では注意の制御と接近型コーピングが、AN患者では注意の制御と回避型コーピングが関連しており、それぞれ異なる脳領域によって媒介されていることが示唆された。さらに前部島皮質、楔前部はともに注意の制御と関連することが先行研究から示されており、注意に関連する脳機能は、適応的なコーピングを支える重要な要因であると考えられた。

第4章では、非適応的コーピングに関連する認知的要因についてソーシャルスキルとの関連から総合的な考察を記し、結論としてパーソナリティ要因や社会的要因のみでなく、共感性や注意の制御といった認知的要因も個人のコーピング選択に影響を与える要因であることを述べた。次に、本論文の臨床的意義として、認知機能の改善を目的とした基礎的なトレーニングによっても、メンタルヘルスの維持や改善が行われる可能性について述べた。最後に本論文の限界点として、非適応的コーピングの定義に関する限界、因果関係への言及に関する限界、結果の一般化に関する限界があることを記し、今後の展望として、因果関係の検証を目的とした心理的介入や、反復性経頭蓋磁気刺激法 (repetitive Transcranial Magnetic Stimulation : rTMS)を用いた脳機能への直接的介入を行うことで、ストレス関連疾患に対する効果的なアプローチの開発につながる可能性について言及した。